

『教師の窓』《特集・教育映画》一九六〇年四月（発行元不明）

どんな教育映画がよいか

矢口 新

これはなかなかむづかしい問題である。第一に、教育映画という概念は広くてさまざまな種類のものが含まれている。子どものための映画という概念とそうちがわない幅をもっている。教育映画といわれるものの中には、劇映画もあれば、漫画映画もあれば、また教材映画もある。また大人むきの教育映画もないわけではない。多少でも教育的だと思われるものは、これごとく教育映画だといえないこともない。しかしそうになると、こんどは教育的とは何を意味するのかということになる。ある人はあらゆる映画から何物かを学びとっているかもしれない。そういう人にとってはあらゆる映画が教育映画だと言えるかも知れない。こうなるとしかし、教育映画ということばを使うことは意味をなさなくなる。そこで、どんな教育映画がよいかという間に答えるためには、なにか限定をおかなくてはならないのだが、さて限定するとなるとむづかしい。

このことは、教育的とかそうでないかということとは、つまり映画自身がつまみつけていることではなく、見る者がもっている、いな見る者との関係でつまみつけてくるということである。そして言うまでもなく、ここでは子どもに対しての教育映画を問題にしているのである。このことは至極あたり前のことであるが、案外忘れられている。教育者がよいと思ったり、映画製作者がよいと思ったりしたただけでよい教育映画とは言えないのであって、それは子どもがきめることなのである。この

ことは、いくら言っても言いすぎでない。大人がこぞって子どもによいなどといっているものが、案外にひとりよがりのことが多いのである。学校の教師はどこまでも子どもの反応を尊重しなくてはならない。子どもの反応を尊重するということは、更に次の問題へと発展する。子どもがよいと言えばよい教育映画だと言ってよいが、その子どもも時と場合でいろいろと異なった反応をするのである。同じ子どもでも学習の場におかれた時と、娯楽映画をみる時とでは明らかにちがった態度を示す。たとえば理科の学習を、もつと言えば、動物の生態を問題にしている時には、そのことが詳しく出ているのをよいと言うのであつて一般的には面白いけれど、ほんとうに自然科学的になつていない映画ではよいとは言わないのである。子どもの反応を尊重するということはこういうことで、ただ一般的に子どもという概念をおいて考えるというだけのことではない。

文部省で教育映画を選定しているけれども、こういう選定の場合にもこのような観点はもつと強くてよいと思う。委員の人たちの趣味でよいとか悪いとか言っている傾向がないわけではない。子どもの学習のどこにどう使うかということがもつとはつきりと考察されて、その場合に子どもがどう反応するかを見て、よしあしをきめるという方法がとられれば理想的であろう、そういうことが大へん面倒なら、少なくともそういう気持ちで、委員にもそういう人を選んで見てもらう必要がある。しかし、実際にはどうもそうなっていない。どちらかといえど委員の趣味である。みな良識のある人たちだから大綱において失しないであろうが、そこには問題がある。

とくに一般の教師がそういう選定映画を受けとる時には十分に注意しなくてはならない。大綱において失しないという点で信頼してよいが、それは、あくまでそれだけのことであつて、それ以上のことで

ない。究極には教師は子どもの反応の方を信頼しなければならぬ。それが正しい態度なのである。選定であっても、子どもがわるいといえどそれはよくない、少なくともその子どもにとってはよくないと考えるべきである。

ここまで述べてくると、教育者ならば思いあたるふしがあるであろう。これはつまり、教材というものの評価の方法ではないかということである。まさにそうであって、私はこれまで、教育映画を子どもの学習において使う場合の教材として考えてきたのであって、その観点からは以上のことはなんら新しいことでもなく、おかしいことでもない。きわめてあたり前のことである。

映画についてなぜこんなことを言う必要があるかといえば、それは映画が娯楽として発達し、すべての人が映画といえど教育映画であっても娯楽映画をみる時のような態度で見るとして、娯楽映画をよいかかわるいかきわめて常識的、通俗的に評価するあの態度で、教育映画、とくに学習に使う教材映画をも評価しようとする。それでも大綱において誤りないであろうが、よき教材としての映画は発見できないであろう。また、そういう態度が多くの人びとにあるかぎり、よい教材映画が製作されることもなからう。娯楽としての映画というワクの中だけで教材を考えているからである。

そういう点もあってよいが、そのワクを出て、まるでちがった教材としての映画も子どもによいものならばよいのである。それはある場合には映画としてはテイをなさないものかも知れない。しかし子どものこれこれの学習でこう使って、それがよくわかり、その学習で使うものとしてはよいというのならそれはよい教材映画である。

教師はこういう考え方にもっと大胆になって欲しいと思う。

(国立教育研究所

員)